



週末に2週連続で台風に襲われた今年の秋、被害に遭われた皆さんにお見舞い申し上げます。また、スポーツするのに最も心地よいこの時期は大会が多数予定されていますから、日程調整などに追われた人も多いと思います。そんな秋でしたが、多くの印象的なスポーツシーンがありました。中でも、社会人野球日本選手権大会で初勝利に挑んだクラブチーム・和歌山箕島球友会の姿は、特に心に残っています。

6年に初制覇して日本選手権にも初出場しました。この時も含めて、クラブ選手権の制覇や予選の突破によって日本選手権に計4回出場しましたが、いずれも初戦で散っています。

試合後にこう言っていました。「試合後にこう言っていました。『企業チームに勝つことが目標じゃない。こういう大舞台でスタンドの応援団と喜びを分かち合うことが大事なんです。だからどうしても勝ちたかった』」

「2点差」を埋める日が来ることを信じ、応援し続けたいと思っています。

【和歌山支局長・麻生幸次郎】

5回目の挑戦は接戦でした。一回表に先頭打者がいきなり二塁打を放ち適時打で1点を先制しますが、先発投手が相手打線につかまって三回途中までに5点を奪われます。しかし救援投手が好投して追加点を与えません。打線は四回と八回に1点ずつ奪って2点差に迫り、九回にも2死三塁の好機を作りますが、及びませんでした。悲願を果たせず、試合後のチームには悔しさがあふれていました。

11月2〜12日に大阪市の京セラドーム大阪で開催された第43回大会に出場したチームは、開幕戦で明治安田生命（東京）と対戦し、3―5と惜敗しました。

クラブは箕島高野球部OBを中心として1996年に結成され、全日本クラブ野球選手権を200

この「悲願」。環境に恵まれた企業チームにクラブチームとして勝つことだと私は長らく解釈

と強調し、「恵まれていると自覚

「2点差」を埋める日

スタンドには、チームが所在する有田市や隣の有田川町、支援企業のスーパ―「松源」の幹部や社員、関係者が駆けつけていました。当初と違って今は県外出身の選手が多くなっていますが、現役引退後も松源に勤務して和歌山で暮らすケースも少なくなく、郷土のチームとして応援されていることがよく分かります。

西川監督は、有田市や松源などの支援を受ける球友会がクラブチームの中で恵まれていると自覚



社会人野球日本選手権大会の開幕戦で和歌山箕島球友会の得点に沸くスタンド―大阪市の京セラドーム大阪で